

第1節 関連事項年表(1963~67年)

- 1963 1.3 国連軍、ジャドヴィル制圧
- 1.14 チョンベ、カタンガ分離独立の終結を宣言。この間にボブ・デナールら傭兵はアンゴラへ逃亡
- 7 ムレレ、北京に1年滞在の後、コンゴに戻る。故郷のクウィルに入り、農村で反乱軍を組織
- 8 コンゴ(ブラザヴィル)でユールー政権が倒れ、左派色の濃いマサンバ=デバ政権が成立
- 9月末 カザヴブが議会解散。ルムンバ派政治家数名がマサンバ=デバ政権下のブラザヴィルへ逃亡
- 10.3 ブラザヴィルに逃げたルムンバ派が、CNLを結成。指導部はグベニエ、スミアロなど。後にムレレ派との関係を喧伝するが、当初はムレレ派とは別の運動体(Y)
- 10.25 レオポルドヴィル州当局は、ムレレを引き渡した者に50万コンゴ・フランの賞金を出すと発表。この頃までにクウィルでムレレ派の反乱強まる。公立学校、行政機関の建物、橋などを攻撃
- 11.22 ケネディ暗殺される
- 11-12月 「社会革命」の際に亡命したルワンダ難民が本国に侵攻。ルワンダ国内では、その報復として多数のトゥチが殺害される(L)
- 12.19 モブツ、ベルギー人軍事顧問とANC大佐とともにクウィルに入り、ムレレへの支持を止めなければ軍を投入すると脅す。しかし、年末にかけて、ムレレ派の活動はクウィルで活発化。国連レオポルドヴィル事務所の報告書によれば、2000~3000人の活動分子がおり、弓矢、やり、ライフルなどで武装している。自分たちはライフル銃にあたっては倒れないし、ムレレは超自然的能力を持つと信じている、とのこと
- 1964 1月 ムレレ派の活動激化。伝道団、聖職者、尼僧、学校教師などを標的とする。ファンデワレによれば、レオポルドヴィル駐在のCIAから、キューバ人亡命パイロットを使って、T-6飛行機で反乱勢力の封じ込めを図る作戦(WIGMO作戦)の発案があった
- 1-2月 スミアロ、ブジュンブラに入り、中国共産党と連携し、東部コンゴ向け工作を開始
- 2.13 この日までに、亡命キューバ人パイロットが操縦するT-6がクウィルで軍事行動開始。キューバ人傭兵の利用は、1961年2月21日国連決議違反であった
- 4.15 ブカヴで若者が警察署を襲撃。スミアロが東部で行った工作に、コンゴ政府が過剰に反応し、地元の若者との間で緊張が高まっていた。これにより紛争が東部に飛び火。同日、ブラザヴィルのCNL本部は、APLを創設し、レオポルドヴィル政府を打倒して革命人民政府を樹立する計画を発表
- 5.15 スミアロ軍がウヴィラを制圧。ANCが100人ほどいたが、戦闘なく制圧に成功(K)。その約10日後にベンベ人の中心地であるフィジを制圧(Y)。
- 5.27 北カタンガのカレミエ(アルベルヴィル)で、センドウェの統治に不満を持つルバ人の若者が蜂起。スミアロの関与あり。反乱軍の援軍がなかなか来なかったため、当初はANCに鎮圧される。しかし、6.18にオレンガ率いる反乱軍小部隊がフィジからカレミエに到着すると、ANCは逃亡し、すぐに町は陥落(Y)
- 5月末 アドゥラ、米大使館に連絡し、東部対策のために米軍の支援、特に戦闘機の支援を求める。ジョンソン政権は既にコンゴへの軍事支援を強化する意向を固めており、T-6戦闘機

- 1964 の改良型である T-28 戦闘機の供与を含めた支援を約束。6 月半ばには戦闘機がコンゴに到着
- 6.4 この日付ニューヨーク・タイムズに、米軍機がルジジ谷で反乱軍から砲火を浴びたとの記事
- 6.9 アメリカ人パイロットが操縦する T-28 戦闘機がブカヴに着陸。その後数日にわたり、近郊地域を偵察、爆撃したが、それが外国人記者の目にとまって記事になると、アメリカ人パイロットはレオポルドヴィルに呼び戻された。アメリカは当初この軍事介入を否定したが、記事が出た後はそれを認める
- 6.12 モブツ、ルジジ谷を訪れ、スミアロ軍と戦う ANC を激励
- 6.13 スミアロ、反乱軍支配地域から外国人が離れることを禁じる。欧米人を標的とした初めての人質作戦
- 6.18 タンガニーカ湖の主要港であるカレミエがスミアロ軍に制圧される。APL の進軍続く。7 月にかけて反乱軍の支配地域は、カレミエ、カバロ、キンドゥを結ぶ地域に拡大し、さらにカレミエから南下してボードワンヴィルへ進軍。反乱軍側はシンバ(Simba: スワヒリ語で「ライオン」の意)と呼ばれる。ブラザヴィルの CNL 本部は、コンゴ川沿いに訓練キャンプを開設
- 6.26 チョンベ、コンゴに帰国し、首相に就任
- 6.30 国連軍のコンゴ撤退完了
- 7.6 カザヴブ、チョンベに組閣を命じる。チョンベ、ムノゴ、カザヴブで重要ポストを割り振る結果になる
- 7.10 MNC/L、チョンベ内閣を認めないとの声明発表
- 7.15 フィジから進軍した反乱軍がカソゴ(Kasongo) 制圧(Y)
- 7.19 ボードワンヴィルがわずか 45 名の反乱軍によって制圧される。カタンガ北部では、ANC の逃亡によって政府権力の真空状態が生じ、反政府勢力が急速に支配領域を拡大(Y)
- 7.24 カソゴに続き、反乱軍がキンドゥを制圧(Y)
- 7.25 コンゴ(ブラザヴィル)領のガンボマ(Gamboma)からゲリラが出撃して、ボロボ(Bolobo)、クワムト(Kwamouth)を占領。クウィルとの戦線接続が作戦の狙い
- 7.31 ANC がボロボを奪還。そこに残された文書から、CNL と中国、ベトナムの繋がりが明白になる。仏語、リンガラ語で記されたゲリラ戦術の説明書は北京で印刷されたものだった。コンゴ(ブラザヴィル)もブルンディとともに中国の影響下にあることが判明。その後、チョンベは、コンゴ(ブラザヴィル)、ブルンディと断交
- 8.1 基本法(Loi fondamentale)に代わり、憲法がコンゴ史上初めて制定される
- 8.5 シンバがスタンレーヴィルを攻撃、制圧。ちょうどベトナムでトンキン湾事件が起こっていた時期。1964 年は米大統領選挙の年であり、ジョンソンは「共産主義に対して弱腰」という共和党候補の批判をかわすために、コンゴへの軍事支援強める。結局、白人傭兵に依存した軍事戦略となった
- 8/10 スタンレーヴィルで、反乱軍のオレンガ司令官と米領事ホイト(Michael Hoyt)が会談。オレンガはアメリカのコンゴへの関与を非難
- 8.11 スタンレーヴィルの米領事館がシンバに占領され、領事のホイトと 4 名の CIA 職員が人質となる。反乱軍は、州知事のキングス(Alphonse Kinghis)にスタンレーヴィルの制圧を任せ、オレンガはブカヴに戻る
- 8.13 カタンガでチョンベに仕えた元英将校ホアレ(Mike Hoare)が、レオポルドヴィルでチョンベとモブツに会う。自国人が参加しなければアメリカとベルギーは傭兵作戦に反対し

- ないと両名に言われたホアレは、南アで傭兵の徴募を開始。8月下旬、38名の傭兵とともに、カレミ工攻略作戦を行うが失敗。ファンデワレから叱責を受ける
- 8月半ば 反乱軍がブカヴを攻撃。これに関して異なった記述あり。 オレンガ率いるシンバがブカヴを攻撃、制圧(8.19)。しかし、自国人が捕虜にされたことに危機感を抱いたアメリカがT-28を用い、ANCと協力して、反乱軍をブカヴから放逐。ANCは初めて反乱軍に勝利する。オレンガはスタンレーヴィルに撤退するが、アメリカが介入したとして敵意を強め、スタンレーヴィルのアメリカ人を逮捕し、軍事法廷にかけると宣言(K)
- 8.15~8.20、オレンガ率いる6000名のシンバがブカヴを攻撃。政府軍はカタンガ憲兵隊を投入して持ちこたえる。戦況は、シの一氏族のムワミ(王)であるカバレ(Alexandre Kabare)が中央政府支持を決めたことで、政府側に有利になった(Y)
- 8.28 チョンベ、ファンデワレを反乱軍制圧地域における全ての軍事行動の調整官に任命。ファンデワレは、ホアレが南アで進めていた傭兵徴募作戦を止めさせる
- 9.3 オレンガ、非コンゴ人をスタンレーヴィルから避難させるという赤十字の申し出を拒絶。非コンゴ人がいなくなれば、ブカヴやウヴィラのようにアメリカが爆撃を開始するという理由
- 9.7 グベニエ、キサンガニを首都とする「コンゴ人民共和国(Républic Populaire du Congo)」樹立を宣言。一時は13カ国から承認を得る
- 10月初旬 モブツ、ホアレに傭兵を使ったスタンレーヴィル攻略作戦を改めて要請。反乱軍勢力が自分の地元の赤道州に及んできたため
- 10.5 アメリカの国家安全保障委員会で、スタンレーヴィルのアメリカ人殺害への懸念高まる。しかし、アメリカはWIGMO投入に消極的だったし、チョンベらが考えている白人傭兵投入計画も政治的にマイナスだと考えていた
- 10.15 アメリカ政府、WIGMOの警戒態勢解除を命じる。ゴドレー(Godley)大使に、反乱軍制圧地域における、WIGMOのみならず全ての米軍関係機の飛行を禁じる訓令を発する
- 10.16 ゴドレー大使、モブツと会い、南ア人が操縦するT-6戦闘機を南ア人傭兵とともにスタンレーヴィルに投入する計画について警告。アフリカにおけるコンゴの立場を弱めるだけでなく、反乱鎮圧に向けたアメリカの努力をも阻害すると告げる。モブツは計画断念
- 11.1 ホアレ率いる部隊が、コンゴロ(Kongolo)からスタンレーヴィルへ向けて陸路出発。この作戦はファンデワレが計画したもののだが、大統領選挙の前にスタンレーヴィルに到着することはないとの見込みのもと、アメリカの了承も受けていた。部隊は縦列で5マイルに達し、ファンデワレはそれをブリュッセルで行われるパレードにちなんでロメガン(L'Ommegang)と呼んだ。傭兵が運転する装甲車が隊列の前衛を務め、次に米パラシュート部隊士官率いる亡命キューバ人で構成されるCIA特殊部隊、それからホアレが集めた南ア人傭兵、カタンガ憲兵隊、最後にANC補助部隊が続いた
- 11.3 アメリカで大統領選。民主党のジョンソンと共和党のゴールドウォーターが候補。ジョンソンが地滑りの勝利を収める
- 11.5 グベニエ、スタンレーヴィルのヨーロッパ人は人質と見なされると宣言。ベルギーとアメリカ、「赤龍作戦(Operation Dragon Rouge)」と呼ばれる人質救出作戦を立案。立案者の説明では、完全な人道目的の救出作戦で、ファンデワレの部隊とは関係ないとされた
- 11.14 グベニエ、ファンデワレの部隊にキンドゥゥが制圧されたのち声明を発表し、スタンレーヴィルが爆撃されれば、1000人といわれるアメリカ人、ベルギー人の人質は虐殺されると宣言。スタンレーヴィルの新聞「ル・マルティル(Le Martyr)」紙は、1964.11.14-15付け記事で、「アメリカ人とベルギー人の心臓を取り出し、呪物を作るだろう。・・・そして、

- 1964
- 11.18 アメリカ人とベルギー人の皮膚を剥いで身に纏うだろう」と脅迫した
スタンレーヴィルで人質になっているホワイト領事や CIA 職員らがルムンバのモニュメント前に引き出され、群衆の前でさらしものにされる
- 11.20 ファンデワレの部隊がブニア (Punia) 制圧
「赤龍作戦」の飛行機がアセンション島を飛ってコンゴに向かう。22 日にカミナ基地に到着
- 11.23 米政府、亡命キューバ人を中心とする CIA 部隊をファンデワレの部隊に投入。CIA 部隊はビッグス・ベイ作戦で亡命キューバ人を率いたロバートソン (William “Rip” Robertson) が指揮。この件は極秘事項とされる
- 11.24 朝 6 時、「赤龍作戦」開始。スタンレーヴィル制圧に成功。コンゴ人 1 万名、ヨーロッパ人 200 名の犠牲者を出したといわれる(B)。グベニエ、オレンガ、スミアロら指導者は国外に逃亡。ホア率いる部隊はそのままコンゴ北東部掃討作戦(「白い巨人作戦(Operation White Giant)」)を継続(K)。しかしその後も、タンザニア、スーダン、ウガンダ経由で反乱軍に支援が流入。特に、山岳部のフレロ人、ベンベ人居住地域には反乱軍が残存(Y)
- 12.9 アメリカとベルギーの軍事介入に反発したアフリカ諸国の要求により、国連安保理開催
- 12.11 国連安保理の演説で、キューバ代表のチェ・ゲバラがアメリカのコンゴへの介入を激しく非難。その後ゲバラは、アルジェリアを皮切りに、アフリカ諸国を訪問する
- 12.30 安保理決議第 199 号。コンゴ内政への不干渉や傭兵の禁止などを決議。スタンレーヴィル攻撃やアメリカ・ベルギーへの非難は盛り込まれず
- 1965 1.13 ウガンダで東アフリカ諸国首脳がコンゴの反乱軍と会見し、タンザニアとウガンダが軍事支援を約束
- 2.7 アメリカがベトナム北爆を開始する
- 2.11 ゲバラ、タンザニアに入国し、カピラをはじめとするコンゴ人反政府勢力と会談。カピラはグベニエと対立し、スミアロとも意見が合わないようだと印象を持つ(G)
- 2.18 CIA、アルベール湖に近いコンゴ領内にウガンダ軍を発見
- 2.24 ゲバラ、アルジェリアで開催されたアジア・アフリカ連帯機構第 2 回経済会議で演説し、第三世界との貿易関係と援助問題をめぐって、ソ連を厳しく批判(G)
- 4 この頃までに、「白い巨人作戦」により、ウガンダからスーダン付近での、反乱軍への物資供給路封鎖に成功
- 4.2 ゲバラ、キューバを出国し、コンゴへ向かう(G)
- 4.23 ゲバラらキューバ人 14 名、タンザニアのキゴマからタンガニーカ湖を渡り、対岸のキバンバに上陸。コンゴ領に潜入。キューバ側からは、コンゴ人反政府勢力指導者の質が低いこと、ルワンダ人難民(トウチ)が反政府勢力に加わっていること、兵士がダワと呼ばれる呪薬(あらゆる武器から身を守るとされる)を信じていることが指摘されている(G)
- 5.6 モブツ、スーダン国境に近いファラジエ (Faradje) で「白い巨人作戦」を視察。東北部をほぼ制圧したことで、反乱軍の未制圧地域はタンガニーカ湖周辺、特にウヴィラとカレミエの間のフィジ、バラカ辺りだけとなる。
- 5.8 キューバ人 18 名がキバンバのキャンプに到着(G)
- 5.22 視察のキューバ閣僚(オスマニ・シエンフエゴス)とともに、第 3 陣のキューバ兵 17 名が到着(G)
- 6.24 新たにキューバ兵 39 名がコンゴに到着(G)
- 6.29 ゲバラらキューバ人兵士、コンゴ軍一箇大隊が駐屯するフロム・ドゥ・フォルスをルワンダ人難民とともに攻撃。キューバ人 4 名が戦死(G)

- 1965 7.7 ゲバラのいるキバンパの基地にカピラがようやく到着。カピラはそれまで、ゲバラの再三の要請にもかかわらず、前線に姿を見せなかった。ゲバラと会談したカピラは、スミアロを強く批判する。カピラは5日後にタンザニアに戻ると、前線には帰らず、そのため部隊の士気も低下した(G)
- 7月半ば カレミエ北方のベンデラ (Bendera) でシンバが ANC を攻撃するが、傭兵の砲撃により撃退される。その際、キューバ兵2名の遺体が発見される
- 7.16 キューバ兵とルワンダ兵、フロン・ドゥ・フォルス、カレミエ間でトラック待ち伏せ作戦を実行。トラックを運転していた傭兵を殺害し、積んであった食料と酒を奪う。ゲバラらは、この時期数カ所で待ち伏せ攻撃を実行(G)
- 8 ホアレ、反乱軍の本拠地フィジ、バラカ攻撃を試みるが失敗
- 8.19 ゲバラらキューバ人グループにスミアロが接近し、援助を要請。カピラが自分たちのコンゴ入国を拒否していると批判。ゲバラは、カピラを信用しないとしつつも、他の者はさらに信用がおけないと見ていた(G)
- 9.28 ホアレ率いる部隊(2400名)がバラカを制圧。9月末にかけ、ホアレの部隊からの攻撃強まる。キューバ兵士らは食糧不足に悩まされる(G)
- 10.10 ホアレと傭兵、フィジを制圧し、掃討作戦を概ね終結
カザヴブがチョンベを罷免。キンバ (Evariste Kimba) を首相に任命。カザヴブは、外国から評判の悪かったチョンベを罷免することで、アフリカのナショナリスト政権から好評を博す。23日にアクラで開かれた OAU サミットではコンゴ(ブラザヴィル)との関係改善も約束
- 10.22 キューバ兵ら、ルボンジャに向けて迫撃砲で攻撃。24日には傭兵の攻撃を受け、かなりの犠牲者を出す(G)
- 11.14 議会がキンバ内閣の不信決議案を可決し、キンバ内閣倒れる
- 11.16 カザヴブ、再びキンバを首相に任命
- 11.20 ゲバラらキューバ兵、キバンパからタンザニアへ撤退開始(～22日)。コンゴでの作戦は成果を挙げないまま終了(G)
- 11.25 モブツ中將がクーデタ。5年間は元首に留まることを表明。ムランバ (Leonard Mulamba) 大佐に挙国一致内閣組閣を命じる
- 1966 5.30 前首相のキンバを政府転覆計画策定で逮捕(ペンテコステ計画)。軍事法廷で即決裁判の後、公開処刑。この転覆計画は、アメリカ筋からモブツに伝えられた
- 6.30 モブツ、独立式典でルムンバを称揚。レオポルドヴィルをキンシャサ、スタンレーヴィルをキサンガニなど、主要都市名をアフリカ風に変える
- 7.23 キサンガニでカタンガ憲兵隊の反乱。カタンガ憲兵隊は、ホアレとともにコンゴ北東部掃討作戦を実施した後、キサンガニに戻っていたが、この日 ANC キャンプを襲撃し、その現地司令官を殺害すると、ラジオ局と空港を占拠。当初、ローデシアや南ア傭兵に率いられていたカタンガ憲兵隊は、この時にはボブ・デナールが統率するフランス・ベルギー人傭兵の指揮下にあった。反乱に直面したデナールは、モブツに連絡し、首相のムランバを交渉のために派遣させる
- 8.18 キンシャサのゴドレー米大使、本国に情勢報告。キサンガニのカタンガ憲兵隊が出身地に戻れば、カタンガは事実上独立状態となり、モブツの立場は非常に苦しくなる、と予測
- 8-9月 モブツ、カタンガ憲兵隊対策として、周辺国との関係改善を模索。コンゴ(ブラザヴィル)、中央アフリカ、ルワンダ、ブルンディ首脳と相次いで会談。親チョンベのアンゴラ

- 1966 植民地対策として、リスボンと断交し、キンシャサに本拠を置くホールデン・ロベルト派勢力との連携を強める
- 9.24 政府側についたデナールの部隊から攻撃を受け、キサングニのカタンガ憲兵隊が南下を開始
- 10.15 ゴドレー駐米大使本国に戻る。蜂起したカタンガ憲兵隊を WIGMO で爆撃するようモブツに要請されたが断り、関係が悪化したため
- 10.26 ムランバ首相を更迭し、モブツ自身が首相を兼任することになる
- 1967 1.26 モブツ、アメリカ大使館に対して、チョンベの活動に懸念を表明
- 2 モブツ、キンシャサに東部、中部アフリカ諸国の首脳を招聘。周辺諸国との関係改善に努める
- チョンベと傭兵による反乱計画が進行。元傭兵の南ア人ピュレン (Jerry Puren) が、やはりかつてカタンガでチョンベに仕えたベルギー人傭兵シュラム (Jean Schramme) に接触。シュラムはキサングニから約 200 マイル離れたプニア (Punia) 近くのプランテーションを傭兵とカタンガ憲兵隊で固め、中央政府の介入を拒んでいた。ピュレンは 7 月 1 日にキサングニとブカヴで同時に蜂起し、南下してカタンガを掌握する計画を立案。ポルトガル、南ア、ローデシア当局の了解も取り付ける (1967 年前半)
- 3.13 1966 年のキサングニにおけるカタンガ憲兵隊蜂起事件に関し、欠席裁判でチョンベに死刑判決 (反逆罪) が下る。数日後、ベルギー当局がピュレンをはじめチョンベ派の家宅搜索
- 5 モブツ、自分の政党である MPR を設立
- 7.1 チョンベが誘拐され、アルジェリアへ連行される。2 年後に獄死するまでアルジェリアに留まる
- 7.5 ピュレンとシュラムを中心とする傭兵部隊が、キサングニとブカヴを攻撃
- 7.6 モブツ、アメリカ大使館に電話し、支援を要請。アメリカは支援に消極的な姿勢を示すが、結局 C-130 輸送機の派遣などを決める。しかし、国内から批判が出る
- 7.12 シュラムの部隊、キサングニから撤退し、プニアに戻る
- 8.8 シュラムの部隊、プニアからブカヴへ進軍し、制圧
- 9.4 キンシャサで OAU 外相会議。主題はナイジェリアの内戦。モブツがアフリカ諸国から受け入れられたことを示す会議
- 11.5 シュラム、部隊を武装解除し、ルワンダ経由で撤収することに合意。国際赤十字によって、ヨーロッパに連行される。カタンガ憲兵隊とその家族はアンゴラに逃亡